

使徒の働き講解①【真のキリスト者の生き方と使命】

本日聖書箇所:使徒の働き1章1-8節・暗唱聖句:使徒の働き1章8節

説教者:鄭南哲牧師
(Rev. Jung nam-chul)

私たちのクリスチャンプレイズチャーチは10月で設立21年を迎えることとなります。2003年10月1週目に正式に始められ、もう今年で21歳の成人のようになり、感無量です。10月27日に、正式に設立感謝記念礼拝として捧げる予定ですが、今日ここまで共に歩んで来て下さっているクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族の一人一人の存在に心から感謝しております。

今日から使徒の働き1章から始め、使徒の働きの全体を学んでいきたいと思えます。使徒の働きはもともとと医者であり、イエス・キリストの弟子のひとりであったルカが、聖霊によって書かれ、テオフィロ(ルカの福音書1:1-3にも書かれている。ロマノの特定の内ある高官か、神を愛するすべての人々にも;テオス+ヒロス:神が愛している人・神に愛されている人の意味)総督に送られた御言葉です。ですから、実際にこの使徒の働きという書には神様から主の教会であり、神を愛し、キリストを信じるすべての人々に送られた御言葉であります。

使徒の働きを英語で、「Acts of the Apostles」と言われます。これを縮約すると、「Acts」だと呼ばれる聖書の御言葉です。学生とみなさんご存じのように、このActsと名詞型は、「Action」であるのにもかかわらず、「Acts」だと決まっている理由は、停止(ていし)されている行動(こうどう)たちではなく、神の御心に従っている人々や教会の群れのダイナミックで、力動(りきどう)的な姿が書かれていたからだと信じます。つまり、神は、使徒たちや教会の姿を、イエス様の弟子であったルカを通して、机に座り込ませて、彼が頭で研究しながら書き記させたのではなく、働きの現場(げんば)で目撃し、ともに行動しながら、神の御業を書き記された御言葉であることが分かります。

ですから、だった一度の行動や一人の行動で終わるのではないので、複数「Acts」で書かれていたでしょう。

ここで、みなさん、信仰も、頭の理念、理論、形ではなく、行動であり、生き方であることを教えて下さっているんですね。

我らの信仰を教会の中だけではなく、我らの家庭、職場、学校などの生活や働きの現場であらわし、あらわされるものであり、そのときこそ、我らの人生のあらゆる領域で神の御助けと導きを、神の恵みの御業を、聖霊の満たしと力を経験出来ると信じ、そう出来るクリスチャンプレイズチャーチの全信仰の家族となりますように心からお祈り申し上げます！

使徒の働きは、御霊の神様が我々のうちに望まれ働かれると、どのようになるのか、つまり、使徒の働きは聖霊の働きであり、信仰の共同体である主の教会がどうやって立てあげられていくのかが分かる主の教会の働きであり、同時に神の国が献身された人々を通してどうやって前進されていたのかを教えてください使徒たちの働きの書でもあります。

今月で教会設立21周年を迎える我々のクリスチャンプレイズチャーチがこれからさらに健康な教会、神の家族の共同体として、聖書的な家庭として生きるべきなのかを、使徒の働きのメッセージは我々に必要なことをたくさん教えてくださいと信じます。ともに謙遜に学び、経験していくみなさんとなりますよう主の御名によって祝福します。ちなみに、10月27日の設立21周年感謝礼拝と持ち寄りによる愛餐会の後、短く聖書クイズタイムがありますが、その時の聖書クイズ大会の本文が使徒の働きとなりますので、これからみんなで、牧場ででも是非是非読んでいきましょう。

今日の箇所である使徒の働き1章1-11節までは使徒の働きの序論として使徒の働きの言いたいことをまとめられてとても大切な部分だと言えます。予言の通り、十字架で死なれた神の御子イエス・キリストは、また予言の通り、三日後に蘇られました。よみがえられたイエス・キリストは、その後、40日間弟子たちに訪ねました。よみがえられてからすぐ、天に昇ってあげられることも出来たのにも関わらず、すぐ天に昇って行かれることなく、イエス様はその前、かならずやりとげることがありました。「イエスは苦しみを受けた後、数多くの確かな証拠をもって、ご自分が生きていることを使徒たちに示された。四十日にわたって彼らに現れ、神の国のことを語られた。(3節)」

イエス様は地上におられた時、毎日福音を伝え、すばらしい奇跡も行われました。しかし、イエス様が中心的に行われたことは弟子たちにフォーカスを合わせ、彼らを訓練されたことでした。なぜなら、イエス様はいつまでも弟子たちとおられず、十字架で死なれ、よみがえられたら、まもなく天にのぼって行かれ、父なる神の御もとに帰られるから、そして、イエス様が天に昇って行かれた後は、イエス様の代わりに弟子たちが地上での主のお働きを続けられることを望んでおられたからでした。そういうわけで、イエス様はあれこれよりも、弟子たちに集中的に彼らと多くの時間を過ごし、彼らを教え、訓練させたのです。

みなさん、動物の飼育員(しいくいん)が猛獣のライオンが入っている檻(おり)に入る時、他の物がなければ、椅子をもって入るみたいです。椅子には四つの足がついていますね。その四つの足に、獅子は自分を攻撃して来るだろうと勘違いして緊張し、警戒しながら、四つの足に見つめてしまうようです。ところが、いったいその四つの足のどちらから自分に攻めてくるか分からなくて、いっぺんに四つの足に集中できないので、しばらく時間が経ったら、ライオンは戦う気が弱まり、ついにあきらめておとなしくなれるみたいです。

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！我々がこの世で生きることも同じだと思えます。我々も人生の中で気になる事柄が、関心事(かんしんじ)が多すぎではありませんか。お金、出世、人との関係、人気、健康、名誉、知識、教育、政治、権力、美しさなど。もちろん、必要で大事な問題もありますが、大事なものは、これらすべてに関心を持つとすることのため、

さらに疲れたり、あきらめ、そのゆえ特に信仰の面において無力になれてしまいがちではないでしょうか。

1.人生のフォーカスを神に置き換える必要があります

我々の罪を贖うために十字架に死なれ、三日目によみがえられたイエス様は天にのぼって行かれる前までの40日の間、弟子たちと会って、いろんな話をされました。

どんな話をされたのでしょうか。使徒の働き1章3節で「**イエスは苦しみを受けた後、数多くの確かな証拠をもって、ご自分が生きていることを使徒たちに示された。四十日にわたって彼らに現れ、神の国のことを語られた。(3節)**」と書かれています。イエス様が弟子たちに語られた内容は「**イエスは確かに蘇られた**」ことと「**神の国のこと**」についてでした。

つまり、イエス様の関心事はこの世ではなく、神の国であり、私たちも神の国について関心をもつべきであるという意味です。

本文6節に「**そこで使徒たちは、一緒に集まったとき、イエスに尋ねた。「主よ。イスラエルのために国を再興(さいこう)してください。この時なのですか。」**

ブレーズ・パスカル(Blaise Pascal)フランスの世界的な神学者、哲学者であり、数学者彼の名作「パンセ」(仏:pensée)「人は神を正しく知らない為、人は自分を正しく知ることが出来ず、常に不安になる。」と言われてましたが、弟子たちは、いまだ神の国を求めるより、イスラエルの復興、この世のことばかりに心が向いていました。

ここで「イスラエルの再興」というのはローマの殖民統治からイスラエルを解放させる政治的な事を意味します。

これは一言で言うと、弟子たちは相変わらず、イエス様を勘違いして出てきた言葉です。

なぜなら神様は創世記3:15で「**女の子孫**」つまりイエスキリストを通して救ってくださることを約束しただけではなく旧約の多くの預言者たちをとおしてダビデの子孫からメシアが生まれると予言されました。もちろん女の子孫とダビデの子孫からのメシア(救い主)というのはイエス・キリストを指し、イエス様による救いとはこの世に属しているのではなく、神の御国に属することでした。

しかし、弟子たちは神様が約束された救いを当然、この世において、政治的な救いとして誤解し、メシアが来たら、ローマの殖民から解放されダビデとソロモンの時代のような栄華を味わえると勘違いしたのです。

そういうわけで弟子たちはイエス様の働きの期間中、イスラエルの王になられ、治められることを期待し、その時、イエス様の右、左につこうとそんなに期待していたわけです。しかし、弟子たちの期待はあんなにすばらしく奇跡を行われたイエス様が捕まえられて十字架につけられ死なれたことでくずれてしまいました。弟子たちはそれぞれ散らされていきました。

ところが、復活されたイエス様に再び出会った弟子たちはついにイスラエルを回復させる時が近づいたと思って「いまこそ、イスラエルを再興させて下さるのですか?」と質問したわけです。

その時イエス様は「いつとか、どんな時とかいうことは、あなたがたは知らなくても良いのです。それは父がご自分の権威をもってお定めになっています。」と答えられました。

愛するクリスチャンプレイズチャーチ信仰の家族のみなさん! 信仰と疑いや好奇心とは違います。

例え、結婚する前の男女は相手に対してただ好きで、もっと知りたい気持ちでいっぱいになりますが、結婚してからは違ってきます。好奇心だけでは住めなくなります。まさに、信頼と愛によって生きなければなりません。もし、結婚した夫婦が一生涯好奇心で夫のスーツのポケットを何があるかがし、妻のハンドバックを捜すならそれは幸せな結婚生活だと言えるでしょうか。このように信仰の生活も好奇心ではなく信仰と愛によらなければなりません。聖書を好奇心からではなく信仰によって読まなければなりません。教会も好奇心から通うのではなく信仰によって通わなければなりません。イエス様も好奇心からみあげるのではなく信仰によってみあげなければなりません。これこそが正しい信仰の態度ではないでしょうか。

神様は我々が知るべきことは知らせ、知らなくてもいいことは知らせなかったからです。しかし、それは信じようとしなくて、知らないことを知ろうとする時、変な異端が作られるのです。特に神様の時と定められた時期は我々が知るべきではありません。ですから、神様が定められた時と時期について知ろうともしなくて、知るべき事をしっかり知り、知らない事はただ信じて主の御手とその時を待って行くのが最善な姿勢ではないでしょうか。

マタイの福音書6:31-33節「**ですから、何を食べようか、何を飲もうか、何を着ようかと言って心配しなくてよいのです。32これらのものはすべて、異邦人が切に求めているものです。あなたがたにこれらのものすべてが必要であることは、あなたがたの天の父が知っておられます。33まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます。」**

もう一度人生のフォーカスを、焦点(しょうてん)を神様に置き換えましょう。そうすると、どうなりますか。今月のデボーションの聖書であるホセア書で見て見ましょう。

「わたしはあわれまれない者をあわれむ。わたしは、わたしの民でない者に、『あなたはわたしの民』と言い、彼は『あなたは私の神』と答える。(ホセア書2章23節)」

ホセア書6章1-3節「さあ、主に立ち返ろう。主は私たちを引き裂いたが、また、癒やし、私たちに打ったが、包んでくださるからだ。2主は二日の後に私たちを生き返らせ、三日目に立ち上がらせてくださる。私たちは御前に生きる。3私たちは知る

う。主を知ること切に追い求めよう。主は 暁のように現れ、大雨のように私たちのところに來られる。地を潤す、後の雨のように。」アーメン！

イエス様はこの世のあれこれより、本文1章8節で、イエスキリストが天にのぼって行かれる前に、最後に弟子たちにこう言われます。

「しかし、**聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。**」

この御言葉によって分かる大切な核心はなんでしょうか。我々には**力**(デュナミス)が必要とされているが、その源泉(げんせん)は**聖霊の神様**によるであると言うことです。つまり、**政治的に、自分の有益などを計りながら周りや、環境に関心をもっていた弟子たちに**イエス様は今あなたがたの人生のフォーカスを神に置き換えなさいと命令された意味であります。

神様の力を受けるためには人や環境ではなく、ただ聖霊に頼らなければなりません。神様に焦点を合わせるためには御言葉と祈りしかありません。そういうわけで、我々は神様の御言葉にいつもとどまるべきであり、いつも祈りの座から離れてはいけません。

イエス様の弟子たちもエルサレムの奥まった部屋で少なくとも10日間(とおかかん)ほど集中的に祈らされたと思います。いつ約束された聖霊が臨在されるのか確約(かくやく)されてない状況で、神の約束が答えられるまで、ただ神様だけをみあげ、集中的に祈りました。私たちも乱れている心をつかんで神様に集中し、聖霊を望むとき、神様の恵みと力を経験されると信じます。

ある人たちは困ったとき、周りの人々に訴えます。人々をつかんで訴えるなんて答えが出るでしょうか。むしろその人はうわさだけを散らばっていくでしょう。そして、居酒屋に行き行って訴えるなんて何が良いでしょうか。酒代だけがつかまるでしょう。我々が訴えるべきところは一つだけあります。それは全能なる神様に叫び求めるときこそ答えがあると信じます。

“わたしを呼べ。そうすれば、わたしは、あなたに答え、あなたの知らない、理解を越えた大いなる事を、あなたに告げよう。”(エレミヤ33:3)

いま、みなさんの人生の焦点はどこに合わせられていますか。自分の固執や、ほかの人々に合わせないで、問題に焦点を合わせないで、神様に合わせるときようやくみなさんが力を得、問題が解決され、答えられる恵みをいただけると信じます。

本文の8節をもう一度読んで見ましょう。

エルサレムから福音化が始まります。使徒の働き1章-7章まではエルサレムでどうやって福音が伝えられ、どうやって教会が立てあげられたかをよく表してくれます。エルサレムの福音化の後、次の段階として‘ユダヤとサマリア全土’の福音化がみられます。使徒の働き8章1節から11章18節までがその内容です。その後13章—28章まで地の果てまで(当時ローマにまで)福音が宣べ伝えられています。そして、使徒の働きは28章で終わらないで、いまでもなお続いているのです。イエス様が再臨されるその日こそが最後の章になるでしょう。ですから、使徒の働きからはじめ、地の果てまで福音が届けられるその日まで神様の国のことは決して中断されないと信じます。

ですから、我々はもう一度自分を武装しなければなりません。‘聖霊のバプテスマを受ける’ということは聖霊がただ、自分に内住(ないじゅう)されてすこしずつ働かれる程度ではありません。日々求め続けることを命じられています。そうすると、聖霊に満たされ満ち溢れるほど満たされることを意味します。自分の考え、自分の言葉と行動、自分のすべての領域において神の力と恵みで満たされることを意味します。水をたくさん飲んで、水でいっぱいになったときおなかを押すと水が口から出てくるように、聖霊に満たされると我々のすべての言葉や考え、行動を通して御霊のすばらしい力が表され、恵みを与え、御霊のすばらしい実が表されると信じます。

イエス様は弟子たちにたくさんのことをするように命じたものではありません。神の国のためにたくさんのことを計画して、たくさんはたらくべきであると言われませんでした。ただ、エルサレムとユダヤとサマリア全土、地の果てまで私の証人と鳴りますと言われました。どんな意味ですか。イエス様はまず、弟子たちがいる近いところから伝えることを進めました。弟子たちにおいてエルサレムとユダヤは近いところでした。しかし、けっしてそこだけでとどまてはいけなことを同時に教えてくださっています。イスラエル人でも、ほかの民族にでも関係なく、さらに、敵対しているいやな人々にさえも差別しないで、福音を伝えるようにと命じられたのです。サマリアはイスラエル人にとっても一番いやな人々でした。イエス様は福音を伝える対象を自分で制限しないで、差別しないようにと気をくばってくださいました。そして、地の果てまで福音を伝えるようにと命じられました。なぜなら、この世においてこのイエスキリストによらなくては自力で救われる人はだれもいないからです。

2. 日々聖霊の充満により、神の力を受ける必要があります

本文の4-5、8節に「使徒たちと一緒にいるとき、イエスは彼らにこう命じられた。「**エルサレムを離れないで、わたしから聞いた父の約束を待ちなさい。55ヨハネは水でバプテスマを授けましたが、あなたがたは間もなく、聖霊によるバプテスマを授けられるからです。8**しかし、**聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力(デュナミス:大きな力)を受けます。**」

そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります」

ここで“父の約束”と“聖霊のバプテスマを受けること”は同じ意味であり、言い換えると“聖霊に満たされること”を意味し

ます。ただし、聖霊に満たされるためにはエルサレムを離れないようにと命じられました。なぜ、イエス様は弟子たちに聖霊に満たされるために静かな山や離れたところで祈りながら待つのではなく、エルサレムを離れないようにと命じられたのでしょうか。

確かなのは弟子たちを含め、イエス様を愛し、慕っていた人々はイエス様を処刑に渡したイスラエルの指導者たちとユダヤ人を憎んでいたかも知れません。そして、古代社会では一人が反逆という罪を犯したというと彼を追いかけた人々をも同じく罪人扱いされたので、イエス様を殺した人々がまた弟子たちにもどんなふうにするか分かりません。そういうわけで、ヨハネの福音書20章19節を読むと、弟子たちはユダヤ人たちを恐れて集まった所を閉めて、隠れたように過ごしました。ですから、弟子たちは当然エルサレムに留まりたくなかったとはずです。

もちろんイエス様はこんな状況になる事をすでによくご存知だったと思います。それにもかかわらず、「エルサレムを離れないで待ちなさい。」と言われたのは、イエスキリストの十字架と復活の福音から離れないように、いつも福音を土台とするようにしなさいという意味と、どんな苦しみがやって来ても信仰を捨てないで信じ続けながら忍ぶべきであるという意味です。信仰を保って忍びながら待つということは信じる者たちにおいても絶対必要とされることでしょう。

韓国である目が見えない少年がいました。10才に父が亡くなり、中学校1年の時、友達とサッカーをしながら目にボールが当たって、2回の大手術を受けましたが、結局網膜(もうまく)が破損されてしまって目が見えなくなったのです。健康だった息子の目が見えなくなったことを聞いた母はショックを受けて二日後急に亡くなり、残されたたった一人の姉が生活のため学校を辞めて、就職して働いている途中働きすぎて倒れて過労死で死んでしまいました。目が見えない少年は絶望と悲しみを耐えることができず、何度も自殺を図りましたが、その時、ある牧師先生に出会って、イエスを信じるようになりました。

彼はイエスを信じた後、周りの状況は別に代わりはなかったのですが、自分の中大きな一つ変化がありました。それはないことにつぶやかないで、自分にできることのため感謝しようと決心しました。それから彼の人生は変わり始めました。彼は18歳に盲人学校で中学校の勉強を始め、韓国のヨンセ大学教育学科を卒業し、1972年、アメリカのピッツバーグ大学で博士学位を取り、アメリカのイリノイ大学教授として働き、とうとうアメリカのブッシュ大統領に呼ばれ、国家障害委員会政策官房に任命され働きました。韓国人としてアメリカで一番高い地位に上がった方ですが、彼の名前はカンヨンウという博士です。カンヨンウ博士は2012年2月23日に膵臓(すいぞう)癌で召されましたが、この言葉を残しました。

“私が絶えず神に頼る信仰がなかったならば、この試練と苦しみを忍ばず、歪みながら自虐したならば、今の私は決まっていなかっただろう。”

そうです。神を信じる者は神の約束を信じ、焦らず神様の時まで耐え忍べるからこそ成功し、祝福されます。

どんな時にもかららず神様の計画と御心があり、神の時があります。だからこそクリスチャンは神様より先に動かないで信じ続けて神の時を待つことが大切であることを覚え、実践して行きましょう。

弟子たちを含め、イエス様を愛していた人々はイエス様を殺したイスラエルの指導者たちとユダヤ人たちを憎み、エルサレムもいやになったでしょう。そしてエルサレムに残っているとまたこれからどうなるか分からない風前(ふうぜん)のともしびのような状況でした。しかし彼らはイエス様から言われた“エルサレムを離れないで、わたしから聞いた父の約束を待ちなさい。”主のお言葉に従って、一つのところに集まって、心を一つにして祈りに専念しました。その結果、イエス様の言われたとおりに弟子たちはみな聖霊に満たされました。愛するみなさん!2024年度後半、どうしましょうか。私たちもどんなにつらくても、イエス様が世の終わりまで我々とともにおられる主の約束を信じて、主の御前で急がないで、焦らず、黙々と信仰と神の御言葉の約束に頼って耐え忍び、聖霊に満たされ、神の力を得て祝福されますように心から願い祈ります。アーメン!

2024年10月から始まった後半も神の国と義のために日々主を慕い求めつつ主の御言葉と祈りをしっかり先に立たせて、聖霊の神によって満たされ、強められ、祝福されるすばらしい人生となりますよう我らの救い主イエスキリストの御名によって祝福し、お祈り申し上げます。アーメン!